

なぜか幸せな心臓手術 ⑦

高橋 一郎

映画監督でありCOMLのボランティアメンバーでもある高橋一郎さん。

昨年心臓の大動脈弁置換術を受けられたのですが、
そのご経験について「**すごく幸せで、病気になってよかった**」とおっしゃっていました。
その体験を連載で綴っていただいています。



● 手術5日目 → 再手術

朝8時、CT撮影をした。その結果、血液が外心膜に少しずつ溜まっており、再手術で血液を取り、出血場所を確認して止血をすることになった。(ワオ!)

ここからは数日前のビデオテープを巻き戻し、もう一度再生するような感じだった(しかも少々早送り)。また手術の同意書にサインした。また麻酔の説明を受け同意書にサインした。10時半、e看護師に伴われて手術室に入る。今回の私は車椅子に乗っている。歩くのもシンドイのであった。前は気づかなかったが手術室に入る通路では音楽がかかっていた。手術室は一番奥左手の部屋だった。前回はここだったような気がする。手術台に乗る。前回同様に暖かくて気持ちよかった。何も考えていなかった。

● CICU再び

「高橋さん、手術終わりましたよ」というE医師の声が聞こえた。今回は手術室で目が覚めた。もちろん記憶はない。人工呼吸器も外れていた。手術を続けて2回も受けたのだ(もうベテランだね)。CICU(心臓疾患集中治療室)へ。時間は15時半。担当はイラストを見せてくれたf看護師だった。「ごろうさまでした、大変でしたね」とあたたかく迎えてくれる。ウレシイ。

C医師の話によれば心臓の表面からにじみ出るような出血があったそうだ。原因はわからない。きちんと止血したのでもう大丈夫ですということだった。胸を開いただけで今回は人工心肺を使っていない。ここで再び「新・医者にかかる10箇条」を思い出さねばならない。9条である。「医療にも不確実なことや限界がある」。普段はただのお題目のように読んでいたが、わが身のこととなってみればひととき味わい深い趣があるものだ。9条をよく胸に刻んでおこう。

しかし今回は術後の痛み止めの量が少ないのか、傷

が痛む。傷といっても胸を切り開いた真ん中の傷ではない。体液を外に出すための管(結構太い)が2本お腹に入っている。これが痛む。もう一カ所、ペースメーカーの電極が胸の浅いところに入っている。これもチリチリと痛む。痛み止めを飲んだり、点滴したりするがやはり意識から抜けることはない。「やっぱり痛いです」「そうですか、つらいですね、テレビでも見ますか?」とf看護師が気を遣ってくれる。気がまぎれるならと用意してくれたテレビを少し見ていたが、「やっぱり痛いよな」という意識の方が強かった。仕方がないので眠ることにした。入眠剤をもらって飲んだ。夜中にスタッフがあっち行きこっち行きしているのを聞きながら浅く眠っていた。

● 再手術2日目

そうか、もう3月なのか。i看護師と話していて気づいた。「早いですね、もう春ですよ、高橋さん」「そうですか、今日からもう3月ですか」。忙しく立ち働いている世間の様子をベッドのなかで思い浮かべた。外はまだマフラーが手離せない寒さだ。こちらは今半袖で暮らしている。まるで別世界だ。みなさまごろうさまです。私はいまこうやってベッドで休ませていただいております。そのうち復帰いたしますので、いましばらくご猶予くださいませ。

ベッドに座ったままレントゲン撮影をした。座る姿勢を保つのが大変だ。E医師がエコーを撮りにきた。結果肺に水が溜まっているらしい。「肺の水を取った方がよいので今から処置をします」ということだ。これも座った姿勢でやるが、レントゲン撮影より大変である。少々前かがみにならねばならない。枕を抱いてできるだけ前かがみになろうとするが傷の痛みで限度がある。とにかくi看護師に背中を支えてもらう。「麻酔しますから、ちょっとチクツとしますよ。ごめんなさいね」。E医師が私の左脇下、背中側に麻酔を打った。続いて水を抜く

ための針をそっと入れた、といっても私はかがんだままなので、後ろ側はまったく見えない。そのままの姿勢で作業は30分以上かかっただろう。水が520ccも出た(ずいぶんと出たもんだ)。手足のむくんでいるのが自分でもわかった。

● 痛いよオ

午後からCICUを出て病室へと戻った。ベッドで座った状態で過ごす、やはり傷が痛む。皮膚は人間の生命を守る最大のバリアだ。そこに痛みを知らせるセンサーが集中しているのは当然のことである。少しの傷でもけたたましいサイレンを鳴らして危険を知らせてくれる。じつに巧妙にできている……(それにしても、痛いよオ)。痰がからんでくるので、咳をしようと思うのだけど、できない。試しに軽く(ホントに軽く)コホン、と上品に真似だけしてみても飛びあがりそうになる痛さだ。たまったものではない。何度も同じことを言うが、痛いのは胸を切り開いた真ん中の大きな傷ではなく、お腹に2本の管を入れるために切られたそれぞれ2cmほどの小さな切り口、そして小さな電極を埋め込んだ胸のさらに小さな1cmほどの切り口。たったこれだけの傷が大そうにも痛むのである。すぐそこにある物に手を伸ばそうとして上体を少し動かすことも、やっていいかどうか考えてしまう。痛みを耐える勇気があるのだ。腹筋を少しでも使うとピンピン痛みが響いてくるのである。普通なら何でもない動作だ。日常の何でもない動作がこんなに大そうなことであるとしみじみわかる。

「Qさん、ちょっと痰をとりましょうね」と担当看護師が向いのベッドで寝ている老人Qに声をかけてきた。「ごめんなさいね」と言いながら彼女は痰の吸引を始めた。とたんに老人が「ア——」と悶絶しはじめた。「苦しいね、ゴメンネー」といいながら彼女は吸引を続ける。「ア——」と苦しむ老人の声が何とも切なくこちらの胸に響いてくるのである。つらいよねえ、とても気の毒だ。入院生活とは痰と血と涙と大小便の世界だ。老人の声を聞いているとこちらでも泣きたくなってくる。(こっちも痛いよオ…涙)。「もうええ、いらん!」という老人の突き放すような声が聞こえた。「終わったからね、Qさんありがとう」と声をかける看護師の声が続いた。

20時半ごろ、入眠剤をもらった。こうなったら眠るしかない。何とかスツと眠りたいものだ、と思うときほど眠れないものだ。隣のベッドのおじさんRが何かブツブツつぶやいている。「ああ、しんどいな、熱あるし……」「水飲みたいわ、水……」。どうやらおじさんRは明日の処置の関係で食事はもちろんのこと、水も飲めないらしい。「チ(舌打ち)……ついてへんな」「腹へってきたで、

ホンマに明日まで食べられへんのか」(静かにしていただいけませんでしょうか)。人はつぶやく動物らしい。実際こんなつぶやきもきちんと誰かに受け止めてもらえると、ずいぶん楽になるのかもしれない。(きっとそうに違いない、何かいい方法はないか?)。結局夜中を過ぎても眠れなかった。入眠剤をもう一度頼むことになってしまった。

● 管がとれた

朝6時ごろ痛みで目が覚めた。痛みが増してくると身の置場がなくなる。朝の痛み止めを早めに飲むと少し落ち着いた。

朝食後レントゲン撮影をした。その結果、お腹に入っている2本の管を外すことになった(ヤツタ!)。問診室へ移動して管はずしてもらったことになった。ところがベッドに横たわるだけで大騒動だった。E医師とd看護師に背中を支えてもらって寝ころぼうとするが痛くて何度も失敗した。とにかく腹筋に少し力が入るだけで飛びあがる痛さだ。いくら背中を支えてもらっても腹筋を使わずに寝転ぶことなんてできない(ということがしみじみわかった)。

でも管が取れるとほんとうに楽になった。ユルユルとではあるが自分でトイレに行くことができる。自分で寝起きできて、自分でトイレに行けて、自分で洗面ができる。ありがたい!

日常の何でもない動作に大きな意味があるということほどここで聞いて知ってはいたが、実際に体験すると意識は変わる。

昼食は車椅子にお膳を載せて運び、デイルームで食べた。しばらくぶりのことである。人心地がついた。「具合どうですか?」、通りかかったB医師が声をかけてくれる。「ありがとうございます、おかげさまで何とか」。そうだ、そういえば今日は日曜だった。入院してから2回目の日曜を迎えたのだった。

病室へ帰って本を読んでいると、向いのベッドの老人Qの痰取りが始まった。「ア——」とまた老人は悶絶し始めた。切ない声が病室に響く。耳をふさぐわけにもいかず、じっと本に目を落とす。でも意識は老人の声から離れられない。痰取りが終わり看護師が病室を出て行った。「やっと終わった」、私がホッと息をついたそのとき、老人がボソツとつぶやいた、「すみません、ありがとう」。確かにそうつぶやいた、昨日「もういらん!」と叫んだ老人が。(そうなんや、おじいちゃんは感謝してたんや)、私は思わず涙が出た。

(つづく)